大和の瓦質祠・瓦質灯籠

なら 民俗通信 209

角南 聡一郎

小さな地域の民俗資料

小さな祠（ほこら、小祠）に祀（まつ）られる民間信仰の神々。まず祠には何が祀られているのかが問題となる。民俗学の主な関心は、事実この部分にある。同時に目に入るのは、どのような祠に祀られているのかということだ。

▽瓦製の祠の本場は大和

木製、石製、陶製といったものに加えて、最近ではコンクリート製のものも認められるようになった。陶製のもののうち、瓦製の祠も一定数存在している。筆者はこの瓦製の祠を全国的に追いかけているが、その本場ともいえるのが大和である。

瓦製のものは瓦質祠と呼ばれる。瓦質祠とは、切妻造り平入りの瓦質焼成を受けた軟質陶器の祠で、小規模な集団が執行する私的な祭祀活動のために生産されたモノである。この類は東北から九州にかけて分布している。

近畿地方でも、大阪府をはじめとして散見されるが、奈良県下から京都府南部にかけては、特に多くの瓦質祠が分布している。奈良県下では、平野部（国中＝くんなか）から大和高原（東山中＝ひがしさんちゅう）にかけて分布の中心があると考えられる。

▽戦国時代には既に製作

古い紀年銘を有する瓦質祠としては、神戸市石峯寺経塚例がある。祠の正面には「大和国西ノ京之住人／瓦大工橋朝臣六郎吉次作／天文二年七月吉日」の銘が認められ、天文2年（1533）段階で、既に大和で瓦質祠が製作されていたことを示す貴重な資料である。

また、大和郡山市豊浦町の瓦質祠資料の右側面には、「正保三年／戌ノ八月吉日／九条町九右ヱ門」と線刻されている。正保3年（1646）に九条町の九右ヱ門より寄進されたものであることが分かる。

祠として製作されたものではないが、瓦質祠に類似する形態がある。瓦質灯籠のうち、釣灯籠タイプのものがそれである。火袋（ひぶくろ）部に日月の透かしを施す点で祠と峻（しゅん）別される。本義的な祠として用いられるのが基本であるが、祠と混同されて使用される場合が多く見受けられる＝写真。

▽「瓦孫七」は現存

生駒郡三郷町勢野の養福寺に所在する瓦質灯籠の側面には、「大和／瓦孫七」の刻印が認められる。「瓦孫七」は生駒郡斑鳩町に現存する瓦屋のことである。

奈良では室町時代～江戸時代初頭には、瓦作りの技法を土器に応用したとみられる瓦質土器が多く生産された。西の京付近で生産されたと考えられる奈良火鉢や奈良風炉は有名であった。これらは銅製品の代用品であることが多く、15世紀の『三十二番職人歌合』には「火鉢うり」が描かれ、「八重さくら名におふ京のものなれは　花かたにやくなら火ばちかな」の歌が添えられ、輪花形に作った奈良火鉢のことが歌われている。

山添・広代八幡神社の瓦質灯籠（筆者撮影）

瓦質祠や瓦質灯籠が多く生産されるようになった背景には、瓦質土器の生産基盤が整っていたことがあるだろう。

▽野神信仰と瓦質土器

奈良県平野部には、ノガミ（野神）と呼ばれる農耕の神を祀るという民間信仰がある。この農耕儀礼の一環として知られるのは、田原本町今里や鍵の「ジャマキ」、矢部の「綱掛け」である。これは今里では毎年6月5日、鍵では毎年6月の第1日曜日、矢部では毎年5月5日に、いずれも藁（わら）で蛇状の綱を編み、集落内を巡行する行事である。

田原本町域では、ノガミは「八王子」「ハツオさん」「ハッタさん」「クサガミさん」などと呼ばれ、名称は一定していない。その多くは瓦質祠や瓦質灯籠に祀られており、御神体は札や石などである。

同町阪手南の阪手カハウト遺跡は、水田の一角に高さ0・5㍍の塚が残存していた。この塚は、戦前までは「クサガミさん」として信仰を集めていたものである。当地の小字（こあざ）は「カハウト」であるが、地元では「カワラド」と呼んでいる。

発掘調査では、中世の木棺墓・土坑（どこう）墓が検出され、上層からは近世の瓦質祠をはじめ、土師器（はじき）皿、銭貨などが出土した。江戸時代以降に信仰された「クサガミさん」は、皮膚病治癒として祀られてきた塚で、中世寺院に付属する墓地が起源と考えられる。瓦質祠の中には、「瓦ヤ三輪町□□□」とヘラ書きが施された資料も認められる。この刻銘によって瓦質祠が、桜井市三輪の瓦屋によって製作されたことを知ることができる。

▽地域史を雄弁に語る

同町矢部では、「ハツオさん」は地区内に8箇所存在した。毎年7月7日から1週間、祇園祭が行われるが、この最初の日にハツオさんがそれぞれ祀られる。筆者が確認したところでは、ハツオさんのうち現在も一つは瓦質祠に、いま一つは瓦質灯籠に祀られており、それ以外もかつて二つが瓦質祠であったという。

瓦質灯籠も含めてこのような小祠は、祀り手を失った時に消え去る運命にある。しかし、木製の祠は朽ちて崩れ落ちてしまうが、瓦質祠や石製祠はモノとして存在し続ける。これらを注意深く観察することにより、その形態や大きさ、焼成などとともに、銘文から製作年代や寄進者、製作者が分かることもある。小さいけれども地域の歴史を雄弁に物語る民俗資料である。

また、現存する伝世民俗資料と出土考古資料を同一の観点から比較検討することにより、現在に至るまでの瓦質祠の歴史的変化を把握することができるのである。

（すなみ・そういちろう＝元興寺文化財研究所主任研究員）